

# 都市コミュニティ論

—コミュニティ計画の理念とそのディレンマ—

倉田 和四生

## 目次

- (1) 都市社会の特徴
- (2) コミュニティ計画の理念
- (3) コミュニティ計画とそのディレンマ
- (4) 都市コミュニティの構造
- (5) 都市生活に近隣関係は必要か
- (6) 新しいコミュニティのあり方

### 〔1〕都市社会の特徴

村落社会と対比される都市社会の特徴は、いろいろな側面について指摘することが出来るが、まず第一に、都市社会では構成メンバーが地域に固定されることなく、大いに移動することが可能である。「流動性」は都市の第一の特徴である。

第二に、村落と都市では社会単位の構成のあり方が違う。村落では人種・職業などが比較的均質的であるのに対して、都市においてはいずれも「異質性」が高く、専門化や分業がすすんでいる。

第三に、村落社会では家族とキンシップが基本的な構成単位となっているのに対して、都市ではキンシップの衰退に代って、第二次的集団が支配的な単位と成っている。ここでは家族は逃避の場としての私的な世界である。

第四に、人間接触のあり方として、村落では依然として直接接触に依存する割合が大きいのに対して、都市ではマス・メディアなど間接接触に依存する割合が大きい。

第五に、人間関係を結合させ、統合するものとして、村落では生活の共同性から生まれ、歴史的に発展継承された共同体の規範が存在するが、都市にはそのような束縛は少ない。自己の秘密を他

人に知られることなく自由に生活することが出来る。生活の「自由」と「匿名性」は都市社会の基本的な特徴である。

第六に、村落における人間の行動様式は伝統的であるから、基本的な行動様式は一度修得すれば生涯これにもとずいて生活していけるので、単純であるといえる。これに反して都市の人間の行動様式は合理的で時々刻々に変化し、また社会の複雑さに対応して極めて複雑である。

第七に、個人に対する評価の基準は、村落においては依然として「生まれつき」や身分的な要素を重視する傾向が残されているが、都市においては「能力主義」による評価が次第に優位を占めるようになってきた。

第八に、村落の行動様式は伝統的であるため、村落の価値体系は比較的固定しているが、都市の価値体系は多くの矛盾するサブ・カルチュアを内包しながら混乱し葛藤している。

(村落)  $\xrightarrow{\text{〔都市化〕}}$  (都市)

- |                        |                |
|------------------------|----------------|
| 1 地域への定着性              | 1 流動性の高さ       |
| 2 人種・職業の均質性            | 2 人種、職業の分化、専門化 |
| 3 社会集団は家族・親族(第一次集団)を基盤 | 3 第二次集団の優位     |
| 4 直接接触                 | 4 間接接触         |
| 5 共同体の規範と連帯性           | 5 自由と匿名性       |
| 6 行動様式は伝統的             | 6 合理的          |
| 7 生い立ち、身分、家格の重視        | 7 能力主義の評価      |
| 8 固定した価値体系             | 8 価値体系の混乱      |

最後に社会統制のメカニズムの違いがある。構成メンバーが比較的少なく、直接接触によって管

まれる社会は「透明な社会」である。このような社会では、通常の相互作用のなかに、規範からの逸脱をおさえる「基礎的な社会統制のメカニズム」が含まれている。村落では人々の間の「うわき話」は強力な社会統制のメカニズムである。したがって村落社会においては逸脱行為は発生しにくいし、もし発生しても大事にいたる前におさえられることに成り易い。

これに反して都市社会は「匿名性」を享受する「不透明な社会」である。このような不透明な社会では、逸脱を統制する基礎的な社会統制のメカニズムの働きを期待するわけにはいかない。したがって都市社会は、構造的にみて逸脱行為のおこりやすい生活環境である。

自由で匿名的な社会は同時に「競争」の社会である。人々はたえざる緊張にさらされており、競争にやぶれて悲運をかこつ人も多い。都市生活は有能な人間にとっては住みやすい「自由な場所」であるが、能力のとばしい人間にとっては「非情な世界」である。

## 〔2〕コミュニティ計画の理念

### 1) ルーラリズムとアーバニズム

すでに述べたように村落社会は「透明な社会」であり、内部統制のきく社会である。これに反して都市社会は「不透明な社会」で内部統制がきかず逸脱行為の発生しやすい社会である。都市的世界では人間関係は手段化され全人格的なつながりはうすれていく。

「流動性」が高く、「匿名性」をよるこぶところから地域社会への関心は次第にうすれ地域のコミュニティは次第に崩壊し非行と犯罪のうずまく巷に化してゆく。

都市化のプロセスが生み出したコミュニティの崩壊をくい止め、コミュニティの連帯性を育成するにはどのような手段を講ずべきか。

このような難問に答えるべく提案されたのが都市計画家の「コミュニティ・プラン」であり、社会事業の「コミュニティ・オーガニゼーション」である。したがってコミュニティ・プランはソーシャル・プランを実施するためのフィジック・プランである。目的はあくまでもソーシャル・プラン

でありフィジカル・プランはその手段にすぎない。ここではまずこのようなソーシャル・プランの理念をたずねてみよう。

### 2) アンチ・アーバニズムの系譜

これまで述べたところから明らかなように、コミュニティ・プランはアーバニズムに対する批判から出発しているから、これは当然、ルーラリズムへの指向をもっていることはいうまでもない。自然と調和しながら自然の中で生きる村落共同体を人間の生活の理想とする考え方がその底に脈うっている。

このようなアンチ・アーバニズムの流れをアメリカ合衆国についてみると、まず最初にジェファーソンのアメリカン・デモクラシーをあげる事が出来る。彼はアメリカの民主主義の基盤を自立農民と村落社会に求めた。ヨーロッパの都市生活を嫌悪し、これが純朴なアメリカ社会に感染することをおそれた。彼は、農民こそ神の選民であり、美德を保持するものと考えた。これに反して都市の市民は悪徳を生み出す国家の不健全な部分であるという。したがって都市化は道徳的な腐敗の尺度であると考えられている。

このような農本主義的なアメリカ民主主義の伝統は「ジェファーソン→トマス・ペイン→リンカーン」と伝えられ、その根底にすえられた。

アメリカにおけるアンチ・アーバニズムの思想の文学上の流れはエマソン、ソーロー、ホイットマンなど一種の自然主義の中にみられる。例えばソーローの場合には、ニューイングランドのコンコードにある「ウェルデンの森」で孤独に生活することによって自然の中に「象徴性」と「簡潔性」と「粗野性」を見出し、これを人生の理想としている。彼は工業化、都市化が進み、世俗化していくアメリカ社会への反逆児であった。

エマーソンもソーローもまたホイットマンも素朴な自然をこよなく愛し、文明を嫌悪する自然主義の求道者であった。

これらの自然主義者の中にエコロジカルな視点が存在したことを確認しておくことは、今日的な意義をもっている。ソーローやホイットマンの文集や詩には、「すべての生物が組込まれており、人間もその一部を占めている生態系の複雑な網

目」がえがかれている。

以上のことから明らかなように、アメリカのアンチ・アーバニズムの流れはジェフ・ファーンソンのデモクラシーと文学・思想上の自然主義が結合したものといえよう。

20世紀初頭の1920年代にシカゴ大学に拠って、シカゴ市を実験場に選び実態調査をおこなったR. E. パークの考え方にも古い村落共同体への郷愁がよみとられる。

パークの都市論の基本的な視点は、都市化による社会秩序の解体を考察することにある。いやおうなしに進行する都市化の波によって都市社会の秩序は危機にひんし、いく多の都市問題を生み出し、社会は解体にむかっている。都市社会学の任務はその実態を明らかにしていくことであった。

その過程の中でパークは次第に消滅していく村落社会にノスタルジーを抱いている。

彼は、歴史的にみてアメリカ生活の基礎は村コミュニティであった。数年前まであるいは今でも、典型的なアメリカ人は中西部の村に住む人達である。それは多分、ルイスが「メイン・ストリート」の中で描いた村である、と述べている。

しかし都市化の波によって、家族、近隣、地域、ローカル・コミュニティが内包する古い型の「社会統制」は根底からおびやかされ、その影響は急速に衰退していく。

パークにとって都市は社会統制がきかず規範が効力をもたなくなった場所であり、そこには人間の廃物がむらがり、犯罪がうずまく。このように都市が解体にむかい、醜悪な塊に化するのは村落社会が崩壊し、アーバニズムが拡大するにもかかわらず、有効に機能する規範を再構成していないからである。村落社会においてはゴシップと世論によってインフォーマルになされていた統制が都市社会においては全く機能しなくなっている。「村落社会」における人間関係はすべて人間の直接接触によって営まれていた。しかもその人間関係は全人格的、運命的なかかわり方であるから、逸脱行為は普通の人間関係の中で統制される。これに対して「都市社会」の人間関係は機能化され、手段化された皮相的なものである。このような人間関係の中に社会統制のはたらきを期待することは不可能である。

そこで都市社会の解体を防ぎ、秩序を再建して温かい人間関係を回復するためには村落共同体にみられたような直接接触による人間関係を都市の中に再生する必要がある。

以上のように、都市的文明を嫌悪し、自然を求める思想の背景には自然の中の生活こそ人間の本質にかなったものであり、村の社会生活こそ人間にとって幸福な生活であるといった村落共同体への郷愁がひそんでいる。

### 〔3〕コミュニティ計画と

#### そのディレンマ

このようなコミュニティ計画の理念を都市計画に具体化した試みがいくつか存在している。その中にはハウードのガーデン・シティ、ペリーの近隣住区、ライトのブロード・エーカー・シティなどがあげられる。ここではペリーの近隣住区計画をとりあげてみよう。

#### 1) C. A. ペリーの近隣住区単位

ハウードの田園都市が「社会改良家」の温かい心で創られたマクロな計画とその実施であったのに対して、C. A. ペリーは都市の中の比較的、小さな「住区単位」についての計画を発表した。またハウードの場合には職・住を含む完結した生活圏であるのに対してペリーの場合には職場を含まない住居専用地区が考察の対象になっている。にもかかわらず、両者がいっている人間生活の理念という点ではあい通ずるものがある。

ハウードの場合にはロンドンやシカゴの町の労働者の貧困な生活に心をいため、これを解決したいという考えが一つの動機に成っていると思われるが、ペリーの場合にも同様に都市コミュニティの墮落と崩壊をくい止め、健康で暖かいコミュニティを再建しようとする動機が秘められていることを見逃してはなるまい。ペリーがこのような村落的な生活様式に郷愁をよせていたことはすでにR. デューイが指摘している。「そこでこの広場自体、意味をもち象徴であり、各部分の単なる合計以上の意義をもつものである。それは近隣住区単位の目にうつる記号である。この広場自体、掲揚台、記念碑、奏楽台あるいは装飾的な噴水など

を設けるのに適した位置におかれる。近隣の共同生活において、それは地方の祭典の場としての機能を果たす。そこでは独立記念の日に国旗が掲揚され、市民たちは雄弁な演説家によって国家的な行為にかり立てられる。」

さらにバリーが都市の中に小規模な住区単位を創造することによって、直接的な接触を高め、都市生活を再生させようと考えたことは、彼のモノグラフの中に都市社会学者 R. パークや社会学者 C. H. クーリーの文献を引用しているところからも明らかである。クーリーやパークにならってバリーも都市コミュニティの崩壊を防ぎ、温かいコミュニティを再建するためには匿名性を身上とする都市社会を小さな単位に分割して「透明な社会」をつくり、その中に第一次集団を育成しなければならないと考えた。手段的、皮相的な人間関係に代えて住民の全人格的な接触をはかることを通してのみ温かい連帯性を回復することが出来ると考えている。彼が構想した近隣住区の原則は次のようなものであった。

- ① 小学校が近隣住区の焦点であり、学童だけでなく、コミュニティの一般市民も使用出来るようにデザインされる。小学校は 1,000 人の学童の歩行距離におかれる。
- ② 周囲を幹線街路でかこみ、通過交通は住区内を通さないようにする。
- ③ 地区内道路は商店や学校、教会、公園などコミュニティ・センターの施設に行くのに適当な狭さとし、通過交通に利用されないようにする。
- ④ 地域の約 1 割は公園やリクレーション地域に割当てられる。
- ⑤ 学校その他の公共施設の用地は住区の中心に適切に配置されるべきである。
- ⑥ 人口に適した一つ以上の商店地区は住区の周囲とくに交差点の内側に置かれる。

この計画が今日のコミュニティ計画に大きな影響を与えたことはよく知られている。

## 2) コミュニティ計画のディレンマ

次にコミュニティ計画の問題点について検討してみよう。すでに述べたように、コミュニティ計

画の理念には、古きよき時代の共同体への郷愁がひそんでいる。そこには村落共同体をパラダイス、エデンの園とみる見方がかくされている。

しかし古い共同体は決して、パラダイスではなく、人々は権力者の力による支配と抑圧、共同体の規範と制約にしんぎんした。村落社会はこの人達が考えているようなパラダイスではなく、人間の運命は生れつきの身分によって決まり、いかなる才能も努力もなんの意味も持ち得ない社会であり、キンシップと村落社会の規範によってしばられていた。村落共同体は、決して美しいハーモニーではなく、狭い世界の中に愛憎がまともにぶつかり合う矛盾と葛藤を内包した人間の世界であった。

封建社会は矛盾に充ちた構造をもっていたが故にいくたの血のあがない(革命)によって近代化は推し進められたのであった。

第二に、R. デューイーが主張しているように自然発生的にコミュニティや近隣が生まれるのは収入・国籍・人種・宗教などの構成において同質である場合であると考えられるが、都市社会の特徴は「異質性」にある。したがってこのように条件の異った都市社会の中で、村落的な社会関係の型を再生しようとしても容易に成功するとは考えられない。両立し難い信念をもっている集団を対置しておけば、その対立は自然に消滅すると考えられる根拠はない。村落社会と都市社会の条件は大きく違っているから、同じものを再生することによって問題を解決出来ると考えるのはあまりに単純で非現実的ではあるまいか。

第三に、コミュニティ論の中では村落的な人間関係、すなわち第一次集団の再生が主張されているが、第一次集団にも二つのタイプの集団があることを理解しなければならない。第一のタイプは自発的な参加によって形成される友人や仲間の集団である。第二のタイプは血縁や地縁などによって、全員加入の形でつくられるものである。しかも小さな村や町ではこれを避けて生活するわけにはいかない。第一のタイプの第一次集団は場所に関係なく人間の福祉にとって重要なものであるが、第二のタイプの集団は本質的でもなければ、望ましくもない。そこでわれわれは第二のタイプの集団を避ける工夫をする必要があるだろう。

第四に、田園都市や理想的な近隣住区は自給自足の経済コミュニティが想定されている。しかし都市社会においては運輸交通とコミュニケーションの手段の発達によって、近隣の住民は日常的に住区の外に通勤したりその他の所用で外部と交流する。これは近隣住区計画の前提条件を否定したことになるのではあるまいか。近隣住区計画は全く違った条件の場所に、もとの社会関係を単純に再生しようと試みているというべきである。

しかもこのような条件の変化によって居住の場所よりも「職場」で形づくられる仲間の方が都市では重要な役割を果たす。職場における第一次集団の意義が増大することによって居住をもとに成立する第一次集団の役割が相対的に減少する。

さらに近代的なコミュニケーションの手段を備えている場合、人々の関心を特定の場所にのみ集中させる必要はない。それにもかかわらず一定の地域に関心を集中させようとする試みは人々を狭い地方主義におしこめる結果となる。それは文化的沈滞をもたらすのみであろう。

第五に、工業化の進展にともなって、都市化——共同体からの離脱——は急激に進んできたが、これは明らかに、人間解放のプロセスであった。「都市の空気は人間を自由にする」という言葉があるように、村落を離れて都市に流入することによって身分の制約をはなれて真の自由を獲得することが可能に成った。われわれは都市化が人間の自由と権利の獲得に果たしたはかり知れない貢献をしばしば忘れがちである。

第六に、五と関連して人間は都市化のプロセスを通して、単に身分的、政治的な自由を獲得しただけでなく、自由な日常生活の享受や創造的な活動が可能に成った。一般的に言えば単に生きるだけの生活から、都市化を通してはじめて自由に創造的な活動が可能に成った。

第七に、コミュニティ計画は本質的にロマンチックな性格をもっている。したがって進歩や変動にたいするとらえ方がきわめて後向きに成らざるを得ない。ジェファーソンを始め、すべての人達が、農村の古い道徳を価値の尺度にして都市の墮落をなげいている。全体としての価値の体系が次第に変化していくことを理解し、進歩の方向を先取りすることなく、いたずらに古い道徳に固執

し、古い道徳観にもとづいて新しい価値を批判することに終始している。これによっては変動する社会に正しく適応することは不可能であろう。

#### 〔4〕 都市コミュニティの構造

現代都市のなかに単純に村落共同体を再生しようとする試みがアナクロニズムにすぎない誤まった試みであることを理解したにもかかわらず、依然として「コミュニティの問題」そのものから解放されたわけではない。急激に進行する工業化・都市化の波に洗われて混乱し崩壊してゆく地域社会の再建は極めて重要な問題である。新しいコミュニティのあり方をさぐるためにまず現代の都市コミュニティの構造を検討し、次いで都市における近隣生活の条件をさぐってみよう。

##### 1) コミュニティ論の系譜

都市コミュニティの構造を論ずる前に、社会学における主要なコミュニティ概念の系譜をたどっておこう。ここではR. マッキーバー、パーク、パースンズの三人をとりあげてみよう。

まずマッキーバーによると「コミュニティ」は一定の「地域」を媒介にして成立する集団で、地域の共同生活の中で「归属感や連帯感」が生まれるものをいう。そこでは、ほとんどの関心を充すことが出来、ほとんどの社会関係が見出せる。コミュニティは大小のアソシエーションや社会関係をつつみこんだ全体である。これに対して「アソシエーション」は単一の関心にしたがってなされる協同である。

次にR. E. パークのコミュニティもまた地域を媒介に成立するものである。彼によるとコミュニティとは、特定の地域を占有する人口と制度の総体をいうのであるが、制度の内容によって生態学的、経済的、文化的-政治的コミュニティを区別しうるから、コミュニティは三つのレベルで分析することが出来る。その第一は生態学的レベル。これは地域空間に対する人間や制度の分布である。

第二は経済的組織。これは生態学的秩序を基礎にして営まれる経済活動。

第三は文化的-政治的組織。人間は自由競争に

よる経済活動のみでなく、文化的、政治的活動を営むものである。これは職業的組織に依存している。

第三に T. パーソンズはコミュニティの構造的要素として、①居住地、②職業、③正当性、④コミュニケーションの複合体の四つをあげている。①の居住地は生物学的、物理的な拠点と社会的な構造との接点であり、コミュニティ成立の条件である。②職業は環境への適応機能をめぐって成立するものである。③の正当性は社会的秩序を支える賞罰が有効に作用している範囲で定められる規範的制度の正当性である。④コミュニケーションの複合体は広い意味のコミュニケーションを意味している。社会システムの構成員は空間的な位置づけの他に相互のコミュニケーションの型が存在し、これが人口の空間的分析や移動を規定している。

これらの概念をふまえながら都市コミュニティの社会構造を考えてみよう。

### 2) 都市コミュニティの構造

都市コミュニティを考察する際、①主要な組織

とその機能連関（全体としての社会の機能連関）②コミュニティ（狭義）の内部構造、③階層構造の三つの視点から考察してみよう。

コミュニティの機能連関を考える場合に定えられる社会の機能的サブ・システムは

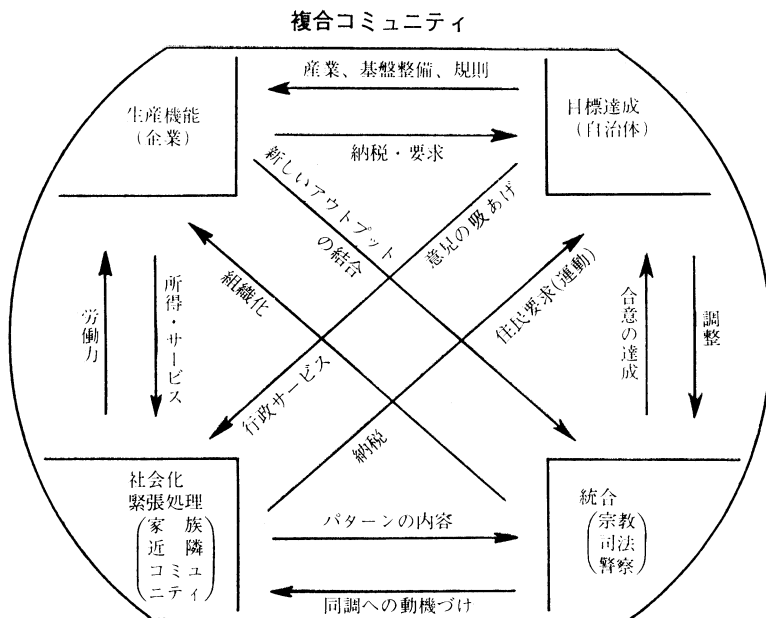
- ① 状況への適応機能
  - ② システムの目標達成機能
  - ③ 成員の社会化・緊張処理機能
  - ④ 成員間の統合機能
- である。

四つのサブ・システムは互いに機能的に関連することによって社会の機能的要件を充足している。さらに四つの機能を分担する組織が存在するから、これと関連させて分析することが出来る。

上に述べた論理にしたがって、都市コミュニティの機能は次の四つに分けられる。

1. 生産機能
2. 目標達成機能
3. 社会化、緊張処理機能
4. 統合機能

これら四つは機能的次元であるが、これにほぼ対応した具体的システムが存在する。それは



1) 企業 2) 自治体 3) 家族 4) 司法・警察等である。

これらの四つのサブ・システムは相互に他のシ

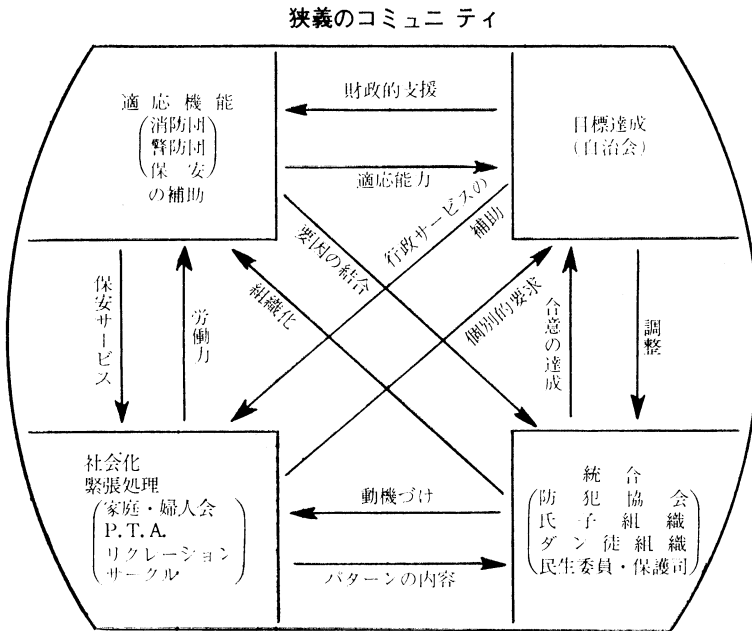
ステムとインプット・アウトプットの関係を通して相互に関連している。

### 3) コミュニティの内部構造

都市コミュニティは四つの次元とそれに対応する具体的システムを持った全体として把握することが出来るが、それぞれの機能はさらに内部的構造をもっている。

ここでは都市コミュニティの四つの次元の中

で、特に、社会化と緊張処理の場を狭義のコミュニティと考えてみよう。現代の大都市においては職住の分離が進み、生産の場と消費の場の分離が進行しているので、混乱を防ぐためにも狭義のコミュニティを設定しておく必要がある。狭義のコミュニティの内部構造は次のように考えられる。



### 4) 階層構造

都市コミュニティの階層構造は村落社会的な構

造から次第に都市的なものになっていく形で見られることが出来る。

(1) 伝統型

名望家層	地元民
自営層	来住者 (地元民)
一般住民	来住者 (地元民)

(2) 都市型 (I)

自営層	来住者 (地元民)
一般住民	来住者 (地元民)

(3) 都市型 (II)

サラリーマン 自営層	来住者 (地元民)
自営層	来住者 (地元民)
一般住民	来住者 (地元民)

伝統的な構造が残っているところでは、村役人あるいは、地元層を基盤とする、「名望家層」を支配層とし、その中間に「自営層」、その下に「一般住民」がいる。しかし、このような伝統的な階層構造は都市化の進展にしたがって、次第にくずれ変化する。名望家層の役割が次第に消滅し、

代って「自営層」が指導的位置につき、一般住民がこれにしたがう。

さらにこれが住民運動に発展するためには地元の自営層に加えて、権利意識に目ざめた来住者のサラリーマンがリーダーシップを取らなければならない。

## 〔5〕 都市生活に近隣関係は必要か

高度の利便性をそなえた大都市の生活において近隣関係やコミュニティは果して必要であろうか。もし必要であるとすればいかなる条件が、これを必要とするのであろうか。この問題を考える手がかりとしてまず「住民自治組織」が現実にとどのような機能を実践しているかをみてみよう。

### 1) 自治会の機能

神戸市の自治会、町内会の調査（神戸市社会福祉協議会 昭和44年12月）によると、自治会が果たしている機能の主要なものは次の通りである。

- ① 保健衛生（カ、ハエ駆除、道路、下水の清掃、ゴミ取りの世話）
- ② 防火、防犯（防犯、夜警、防災）
- ③ 募 金（共同募金、日赤募金）
- ④ 祭 礼（神社の祭礼、行事、寄付）
- ⑤ 福利、厚生（交通安全、老人クラブ、子ども会の育成）
- ⑥ スポーツ、レクリエーション（親睦旅行、スポーツ、運動会）
- ⑦ 慶 弔（出産祝、香典、弔旗）
- ⑧ 上 木（道路、下水溝の補修）
- ⑨ 教育、文化（各種講習会、趣味、クラブ）
- ⑩ 生活改善（虚礼廃止）

これら10機能のうちで、行政の補助的なものは①、②、③、⑤、⑧で、他は親睦的（④、⑥、⑦、⑨、⑩）なものである。

もし今後、行政サービス水準が向上することによって自治会の行政の補助的な機能は次第に消滅するであろうと考えるならば、親睦的、近隣づきあいの機能のみが残ることになる。

大都市の自治会は依然として、行政補助的な役割を果たしている。もしこれがなければ都市行政はたちまちマヒするであろう。また行政水準がいかに向かっても住民の協力は依然として必要である。しかし次第に行政サービス水準の向上にともなって、行政補助的なものから親睦的なものへと比重が変化するのである。

### 2) 人間性の基礎

近代化の過程の中で人間の生活は合理化され機

能化されていく。しかしながら人間の存在のあり方そのものからみて、人間が完全に合理化されることはあり得ない。フロイトやパレートの示しているようにむしろ人間性の基礎は、非合理的なものである。本質的に非合理的・情緒的な存在としての人間は合理的、機能的、皮相的な関係に満足せず、直接的、充足的、全人格的な人間関係を要求する。家族、近隣、コミュニティは、このような人間の根源的な要求に答えるための社会的制度である。

### 3) 地域生活の社会性

現代の都市生活では職住分離が進み、流動性が高まっていく。このような状況の中で核家族の生活はどのようなものであろうか。

職住分離によって、夫はコミュニティの外部に通勤することが多いためコミュニティ生活の担い手は妻にゆだねられる。妻を中心に未婚の子女がコミュニティの主要な生活者である。

さきに述べたC. A. バリーが、この近隣住区計画を発表したねらいは、自動車時代の危機から居住地区をどのようにして守るかという願いと、子供を養育している家族がより良い環境を求める要求に応えるという二点にあった。

「家族」の環境への要求を考える場合、彼がライフサイクルを視点にすえていることは重要である。独身の男女はアパートで大都市の「自由」と「匿名性」を享受することを望むが、結婚して子供が出来ると要求が変化し、庭つきの一戸建を欲しがるようになる。

「子供」はコミュニティの主役である。彼らは大地と密着しながら仲間と遊ぶことを通して成長していく。子供は同じ年頃の子供との遊びの中でギブ・アンド・ティークを学び、また他者との関係の中で自己を発見し、形成していく。もし大人だけの世界に置かれる場合には、大人のもつ規範に一方的にはめこまれるが、これは子供のもつ生理的な衝動と葛藤するためフラストレーションを生み出し非行の原因をつくることになる。したがって、このような状況では社会性や適応性を十分に発達させることは出来ない。

一才半位迄は家の中で保育することが出来るが、その後は屋外の広場で同じ年頃の子供達と遊



ばせる必要がある。

また人間の思考の発達には時間的にも空間的にも他者を媒介にした体験を通して広がっていく。子供は他人殊に子供同志のコミュニケーションによって得られた情報の中から選択して自己形成を行なう。すなわち子供の精神的発達は同世代の人間との共通の経験を通してのみなされる。子供にとって重要な共同経験はまず近隣の広場、道路上で展開されなければならない。少年ギャングのグループがコミュニティを縦横にあばれまわって活躍していくプロセスの中で、地域への愛着が生まれ共同意識が形成される。

このような子供達が要求する物理的、社会的環境を十分に提供し整備することは、次代の後継者を育成するための条件である。

「主婦」は子供達の要求を最も良く理解しそれをかなえる事実上の責任者であることはいうまでもないが、同時に主婦の生活そのものの中に近隣づきあいを必要とする条件を備えている。主婦はもともと家庭に密着した生活をいとなんでいるため近隣地域に深い関心をよせ、関係をもっている。主婦の生活は地域を離れることが困難で、これを基盤に広がる近隣のつきあいは極めて重要である。現代都市の生活がいかに便利になったとしても、近隣と無関係に生きることは困難である。さきに見たように現在の地域住民組織は依然として行政サービスの補助的な役割を果たしている現実であるから、なによりもまず保健衛生などのサービスをめぐって協同せざるを得ない。

さらに子供の近隣活動や遊び友達を通して近隣との関係はさらに深まっていく。

最近、家事の合理化が進み、所得も上昇し、計画出産で子供の数も少なくなり、主婦の余暇時間も増大していく。余暇活動はコミュニティの外でもなされるが、教養、趣味のサークル活動などのようにコミュニティの内部で実施するのが最も手近である。今後コミュニティの内部における余暇活動がますます重要になっていくであろう。コミュニティ・センターはこのような要求に答えるための拠点である。

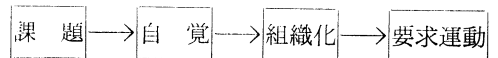
#### 4) 地域生活の政治性

人間の行為は単に他人と協力するという意味で

社会的であるだけにとどまらず、すでに示したように目標達成に向って行動するいわゆる「政治性」を備えている。人間は政治的動物である。現代都市のコミュニティにおいて個人が政治的に自覚して組織化がすすみ、運動が展開される基盤は何か。

いわば自然発生的なものとしての近隣関係が単なる近隣関係にとどまらず、組織化され集団や組織にまで高められる条件は、1)「物理的、自然的緊急事態の発生」2)「環境保健の問題」である。終戦後、町内会は解散を命ぜられ、旧役員は戦争協力者として公的な活動を一時禁止されたが、昭和25年ごろから急速に自治会的なものが復活していくきっかけは、総括的に表現すると、のびきならぬ「生活の防衛的」なものであった。単なるおつきあい以上に団結し、生活を守らなければ生きていけないという条件は決してなくなっていないし、近い将来、行政サービスが良くなったとしても、すぐにこの条件が消滅するとは考えられない。逆に各種の「公害」や「交通戦争」の激化にともなって生活防衛のための住民の戦いは激烈になっていく可能性すらある。

しかもこのような生活の防衛は単に受け身の態度から、もっと積極的な行動に高められる。というのは「生活防衛」や各種「公害」の問題のかなりの部分は行政サービスによってカバーすべき性質のものだからである。また仮に行政の責任でない場合にも、市民の豊かな生活を守ることは行政最大の目標であるから、そのような困難を解決するために、最大限の援助をしなければならない立場にある。したがってこのような「生活防衛」の戦いは、自治体への請願や要求といった住民運動に発展し、さらにより高い水準の要求となる。市民はこのような住民運動の過程を通して「地域」に関心をもち愛着心を高めていく。このように住民が、



の過程を通して高められた住民意識はコミュニティの建設、整備に結晶する可能性をもっている。

以上、行政サービスの水準からみても子供の人格形成と主婦の生活構造からみても、また生活防衛の視点からみても、都市コミュニティにおいて

は、今日ますますコミュニティの必要性が高まっているといわなければならない。

しかしながら人々はあらゆる関心をコミュニティに集中しなければならないと主張しているわけではない。現代の都市人は一方において、無限に広がる空間に存在する組織と「機能的な関係」を保ちながら、同時に、コミュニティと「実質的な関係」をもつことが望ましい。

## 〔6〕新しいコミュニティのあり方

これまでコミュニティ計画の理念とそのデレンマについて述べ、都市コミュニティの構造と現代都市生活における近隣関係とコミュニティの必要性を吟味してきた。

現代におけるコミュニティ計画は困難なデレンマに当面している。しかしそれにもかかわらず我々の生活は近隣の関係を必要とするだけでなく、それは組織され、運動にまで高められる必然性があるし、そのためのコミュニティづくりが必要である。

### 1) 新しいコミュニティ

新しいコミュニティ作りのねらいは、産業化、都市化の荒波の中で崩壊しつつある都市社会の解体を防ぎ、地域を媒介にした人間接触を高めて連帯性を回復しようとするものである。

しかしコミュニティ計画の中には、デレンマを秘めていることをすでに明らかにした。そこで今後、我々がコミュニティ計画をすすめる場合、注意すべきいくつかの点が指摘される。

まず最初に注意すべき点は、古いコミュニティ（共同体）への単純な復帰を指向してはならないということである。異った生活条件の中に古いコミュニティを単純に復活すれば、問題が解決されるどころか、そこにはより大きな混乱と社会解体が生まれるだけである。

次に新しいコミュニティは鎖された世界ではなく、「開かれたシステム」でなければならない。個人は自己の選択によって自由な参加が認められる。要するに個人の自由意思が尊重され、個人の立場を優先させる社会構造である。

第三に、古いコミュニティが固定的な社会であ

ったのに対して、新しいコミュニティは「流動性」が高い。開かれた社会の中で自由な流動が行なわれる。流動性の高さは他律的な活動に対しては、拒否的であるが、自発的な活動に対してはむしろ強い指向性をもっている。

高い流動性にもかかわらず、コミュニティへ深い関心をよせ、活発な交渉を通して温かい連帯性を創り出すことが新しいコミュニティの課題である。

第四に、新しいコミュニティは限定的な機能を営むのみであって、あらゆる機能を充す自己完結的な世界ではない。したがってコミュニティ自体が経済活動の機能を営んだり、公的な教育活動を営むようなことはない。その主要な機能は専ら、非公式の社会化と、緊張処理(レクレーション)の機能に限定される。

第五に、都市社会の異質性にこたえうるようなコミュニティでなければならない。都市の社会は学歴、職業、収入等からみて多様な社会である。したがって考え方や要求にも「多様性」がある。新しいコミュニティはその多様性に応えなければならない。

第六に、「自由と匿名性」の問題がある。これらは現代都市の本質としてこれまで一セットとして発展してきた。しかしコミュニティの建設はこのセットを切離し「自由」のみを残しながら匿名性を一つのコミュニティの中では可能なかぎり少なくしようとする試みである。この矛盾を含んだ試みを成功させなければならない。

第七に、新しいコミュニティにおいては可能なかぎり、メンバーの「直接接触」を高めていかななければならない。これは古いコミュニティの接触の様式であるが、これを個人の自由の基盤のもとでますます高める必要がある。

### 2) 新しいコミュニティの形成をめざして

このような条件を備えたコミュニティはどのようにして形成されるであろうか。一言にしていえば、それは沈滞した静的なコミュニティを「動態化」することである。それはいかにして可能か。

第一に必要なことは、主観的な側面として、個人の態度、価値に根ざした生活様式の転換をはかることである。新しいコミュニティは人々が人間

的なふれ合いを求める場であり、しかも自発的に交流する場である。したがって、そこにとけこむためには余暇を享受する習性と自発的な社交性をもち、創造的な活動に指向する人間が要請される。勤勉なだけのエコノミック・アニマルは十分に余暇を楽しめるクリエイティブ・マンへの自己変革が必要である。

第二に、コミュニティ活動に必要な公共の場を設け、その利用の極大化を計ることである。公共の施設はそれ自体が目的ではない。施設の利用を通してメンバーの人的接触を高め人間の絆を強めていくことである。鎮守の社や寺院の公共性が次第に失なわれ、一般的な利用（民族の遺産は、公共的なものとして大いに利用さるべきであるが）があまり期待されない昨今において、メンバーの人的接触を高め温かい絆を強めていくためにコミュニティの公共施設の果たす役割は大きい。

第三に、コミュニティを基盤にして、自由意思にもとづいた創造活動を活発にすることである。これは具体的にはコミュニティの中にアソシエーション的な活動を極大化していくことである。各個人は不必要になればいつでもそこから退去することの可能な体制が確保されていなければならない。その意味でボランティアスタックな活動がコミュニティの内容をなすものである。このような自由な活動の網の目がすべての構成員をおおいつくすときコミュニティは動態化される。

第四に、新しいコミュニティは自発性と主体性を備えた個人を前提として成立つものであるが、複雑な社会においては、コミュニティのすべての情報を熟知し、自己の欲求に応じて有効な資源を活用することは決して容易なことではない。したがって媒介者として専門職的なワーカーによるコミュニティ・オーガニゼーションもまたコミュニティを動態化する有効な手段である。町の顔役に私的な形で口をきいてもらうというやり方では、十分にその効果を期待し難い。やはり専門的な知識を身につけたワーカーによる側面的な援助がなければならない。ワーカーはその地域に定住してコミュニティにとけこみ、コミュニティ活動を側面から援助する。

第五に、コミュニティのコミュニケーションのネットワークを有効に作用させ、自発的な住民参

加をますます活発にしていく工夫をすることである。地域の住民組織には自治会のように住民の必要から、いわば下からつくられるものと、民生委員のように行政から委託されるものがある。両者は現実において、同じように行政の補助的な仕事を果しているにもかかわらず、自治会(町内会)の場合には依然として戦時中の町内会の暗い影を宿しているのに対して、民生委員の場合には公的なものとして受けとめられ評価されている。自発的な住民参加を高めていく一つの工夫として、自治会(町内会)の役割を見直す必要があるのではあるまいか。殊に自治体による公式の認知によって自治活動は活発化するであろう。

これまで住民の意見の反映や要求は生活の身近かな問題に限定される傾向にあるが、むしろ都市目標や総合計画のような次元の高い課題に対する参加がはかられなければならない。

最後に地域の問題を協同して解決しようとする「住民運動」がある。最近、公害問題をめぐって住民運動がにわかに活発化してきたが、これがコミュニティを動態化する主要な契機であることはいうまでもない。地域がかかえている共同の問題を目覚し、これを協同しながら解決に向うことによってコミュニティの共同性を体験し、連帯を作り出す。すでに述べたように抵抗型の住民運動にとどまることなく、もっと積極的な高次元の市民参加がのぞまれる。

## む す び

新しいコミュニティ創造の必然性をとくためには、現代都市における人間生活の二重性を確認しなければならない。如何に社会が変化しようとも人間は直接的な接触による全人格的な交わりを必要としている。全人格的な交わりは居住の地点のみに限定される必要はないが、まずなによりも居住の地点をめぐって作られるのが自然である。これが現代都市においてコミュニティが要請される基本的な理由である。

現代人は一方において狭いコミュニティの中で全人格な交わりを求めながら、他方において利便性と機能性を無限の空間において追求する。ゲームンシャフトからゲゼルシャフトへではなく、あくまでゲームンシャフトを残しながらゲゼルシャ

フト化をすすめなければならない。

はげしい社会変動、ことに都市化の荒波のなかで衰退しつつあるコミュニティは二重のパラドックスを背負わされている。それ自身「基礎社会衰耗の法則」によって衰退に向かいつつあるにもかかわらず、人間疎外の克服のためにコミュニティの創造が要請されている。しかしそれは古いコミュニティの単純な復元ではなく、むしろその内部にアソシエーションの拡大という「自己否定」によってのみ可能である。その際、「流動性」、「開放性」、「自発性」は古いコミュニティを破壊して新しいコミュニティを創り出すために極めて重要な役割を果たすであろう。

参 考 文 献

- (1) 都市社会の特徴
  - ① ソローキン-ジンマーマン・京野正樹訳「都市と農村」刀江書院 1940.
  - ② パーク・大道-倉田訳「都市」鹿島出版 1972.
- (2) コミュニティ計画の理念
  - ① 「ジエファースンの民主主義」ソール・K. パドヴァー編・富田虎男訳 有信堂 昭和36年
  - ② ソローキン・富田彬訳「森の生活」角川文庫 1953
  - ③ ホイットマン・杉木ほか訳「ホイットマン詩集・草の葉」岩波文庫 1969
  - ④ 東山芳男著「ソロー研究」弘文堂 昭和36年
  - ⑤ ラッセ B. ナイ 原島善衛訳「アメリカの知性」北星堂 昭和44年
  - ⑥ エマソン・柳田泉訳「代表偉人論・自然論・論文鈔」世界大思想全集(21) 春秋社
  - ⑦ 酒井雅之著「アメリカルネッサンス序説・エマソン・ソロー・ホイットマン」研究社 1969
  - ⑧ エマソン・原島善衛訳「エマソン選集4. 個人と社会」日本教文社 昭和35年
  - ⑨ 志賀勝「エマソン」養徳社
- (3) コミュニティ計画とそのダイレンマ
  - ① C.A. Pery, The Neighborhood Unit, 1929.
  - ② 鈴木広編訳「都市化の社会学」誠信書房 昭和40年
  - ③ M.J. Beshers, Urban Social Structuer, 1961.
- (4) 都市コミュニティの構造
  - ① R.M. McIver, Community, 1927.
  - ② R. パーク・大道-倉田訳「都市」(1925) 1972.
  - ③ T. Parsons, Structuer and Process in Modern Society, 1960.
  - ④ T. Parsons, The Sociol System 1950.
  - ⑤ T. パーソンズ・富永訳「経済と社会」岩波書店 1958.
- (5) 都市生活に近隣関係は必要か
  - ① 神戸市社会福祉協議会「神戸の住民自治組織」昭和45年6月
  - ② 神戸市相談課「住民自治組織の実態調査」昭和47年

その他の参考文献

- ① 国民生活審議会調査部会編「コミュニティ」
- ② R.M. McIver, Society, 1949.
- ③ R. Redfield, The Little Community, 1955.
- ④ R.E. Park, Human Community, 1952.

- ⑩ E. ハワード・長素連訳「明日の田園都市」鹿島出版, 昭和43年
- ⑪ 志賀勝「ソローの言葉」西村書店 昭和22年
- ⑫ 石田憲次「エマソンとネオヒューマニズム」研究社 昭和33年
- ⑬ H. カーヴァー・志水英樹訳「郊外都市論」鹿島出版 昭和44年
- ⑭ 谷川正己著「フランク・ロイド・ライト」鹿島出版 昭和42年
- ⑮ F. ライト・谷川正己訳「ライトの都市論」彰国社 1968
- ⑯ 佐々木広著「コミュニティ計画の系譜」鹿島出版 昭和46年